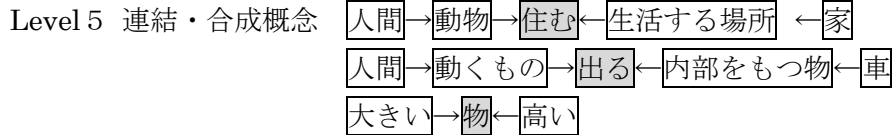


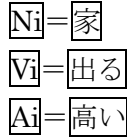
「自然と言語概念の考察」

□自然の対象階層

(記号レベル)



Level 4 単純概念



Level 3 概念的特徴

Has-a-roof, Has-walls, Has-rooms,  
 Movement-form,  
 Inside-to-outside,  
 Subject-is-movable,  
 Difference-in,  
 Length,  
 Subject-  
 Has-vertical-  
 Direction,

(符号レベル)

Level 2 知覚的特徴

屋根の形、家の外郭等  
 物から物への移動  
 比較（長さ、高さ…）

Level 1 生データ

家の形の映像  
 車からボートへ乗った映像  
 富士山とビル、タワーと木などの比較映像  
 実世界（実写）

(外界)

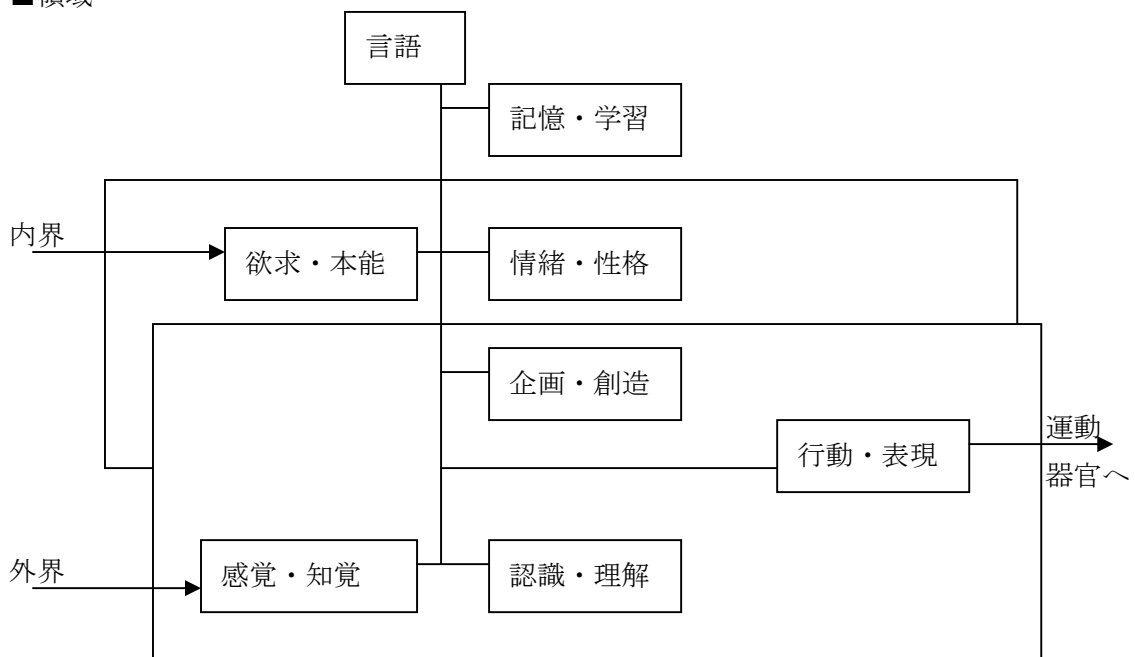
(概念的特徴と知覚的特徴)

(第1種) 概念的特徴	知覚的特徴
存在 (S,T)	時刻 T において S が存在する
時間経過 (T0,T1)	時刻 T0 から T1 にかけて時間が経過する
移動 (S, (T0,T1))	時刻 T0 から T1 にかけて S が移動する
内 (S,OF,T)	時刻 T において S が OF の内部にいる
外 (S,OF,T)	時刻 T において S が OF の外部にいる
高さ (S)	S の垂直方向の長さを測る

(連結合成概念)

表層構文フレーム	主として動詞の格。前置詞や語順の指定する規約
表層意味フレーム	深層構文フレーム、行為を中心とした語の意味、関与者、道具、経路と戦略、目標、結果及び副産物に関する限定詞と関係
主題フレーム	話題、活動、描写、背景、通常、話題と結びつく際立った問題や戦略
物語フレーム	物語、説明及び議論、聞き手の心に新しい主題フレームを作ることを目的とした焦点、主人公、筋、展開などに付いての規約

■領域



内界□は、情緒処理

外界□は、知的処理

**感覚・知覚**： 五つの感器によって外界からの入力刺激を受理し、知覚的特徴を抽出する領域。並列処理、ハードウェア化されたレベル1またはレベル2。

**認識・理解**： 感覚・知覚領域からの出力データを、概念データに対応付ける領域。レベル3からレベル5で処理する。

■**解釈**：あるレベルのデータを他のレベルのデータへ対応付ける操作。

すなわち、異なったレベル間の操作で、レベル1～レベル5までの対応付け。

■**認識・理解**：意図に適った解釈のこと。

すなわち、「意図的」に受理した場合はその意図に応じた特定の領域、更にはフレームが定まるものと考えられる。

**欲求・本能**： 空腹感、疲労感、など内界からの生理的データを受理し、それぞれ食事の欲求、休息の欲求、性的な欲求などを生起させる領域。レベル 1 からレベル 3 で処理される。

各欲求に対しては内的な感覚器が備わっているものとし、  
これらは**デモン**で実現すると好都合である。

■**意図**：生起した欲求のことを言う。

例えば内的感覚器がレベル 1 で入力刺激を受理されると、次にレベル 2 で空腹感がわく、するとレベル 3 で、「何かを食べたい」という欲求が生ずる。

**情緒・性格**： 認識・理解領域では入力データを客観的事実として受け止める。それに対し情緒・性格領域は入力データの価値を主観的に評価する領域で、レベル 3 からレベル 5 にかけて処理が行われる。通常評価に依存して欲求におけると類似の意図が発生し、それに従った表現や行動が伴う。なお情緒や性格はしばしば形容詞で表現される。

レベル 4 で行われる評価を「情緒」、  
レベル 5 で行われる評価を「性格」という。

■**本能**： 生存と直接結びつく尺度をいう。

■**情緒**： 生存と間接的に結びつく尺度をいう。

**企画・創造**： ある一つの目標が与えられると、その目標を達成するためにどのような心理的／物理的行動を取れば良いかを企画する領域。

レベル 4 とレベル 5 で処理される。

**行動・表現** 領域 5 で企画あるいは創造された一連の行動ないしは表現の準備をする領域で、レベル 6 から逆にレベル 1 にかけて処理が行われる。

(例) 領域 5 で食事をすることが企画された場合、領域 6 では、まずレベル 5 において「食事」の主題フレームを記憶・学習領域から呼び出す。

そこには、

(1)左手で茶碗を持つ動作

(2)右手で箸を持つ動作

(3)腕を曲げる動作

(4)口を開ける動作

(5)歯で噛む動作

など、食事の全体的構成が記述されているので、これらを解読し個々の動作（単純概念）をレベル 4 に引き渡す。次にレベル 4 では、やはり記憶・学習領域から概念的特徴で記述されている動作を取り出し、分解してレベル 3 へ引き渡す。更にレベル 3 では、個々の概念的特徴に対応する成分的動作(例えば茶碗を持つための指の動き)を取り出し、レベル 2 へ引き渡す。レベル 2 では成分的動作を符号列に分解し、レベル 1 へ引き渡す。

最後にレベル 1 では、符号列に対応して手や足などの効果器を動かす信号を生成する。

**記憶・学習** : 与えられたデータをありのままあるいは抽象化して記憶する領域で、レベル 1 からレベル 5 にかけて処理が行われる。データは自分の領域も含めてすべての領域から供給され、かつまたすべての領域へ供給される。記憶と学習は密接不可分である。学習は八つの領域の随所で起こる。しかし学習の基本操作は、入力データや処理領域には依存しない。この基本操作は抽象化の操作、換言すると「**クラスへの統合化**」の操作であると考えられる。

**言語** : 言語を解析、生成する領域で、レベル 1 からレベル 5 にかけて処理が行われる。ここで「言語」とは、形態論、音韻論及び構文論を指し、意味論や語用論は含まない。それは意味論や語用論は非言語領域であり、記憶・学習領域などに蓄えられている心理データだから。

- (1)心の中の任意のデータや処理を観察する機能
- (2)高次の思考や推論をまとめる機能
- (3)他の人と通信する機能

(第 1 版)

[⇒ cTag > 意味位相空間ページへ](#)